ドイツ義勇軍経験とナチズム運動

――ヴァイマル中期における「独立ナチ党」の結成と解体をめぐって――

今井宏昌

1　はじめに

「ベルリンにはハウエンシュタインという名のゴロツキが生息している」――一九二六年一〇月一六日、ナチ党（ＮＳＤＡＰ）大ベルリン大管区指導者に就任する直前のＪ・ゲッベルスは、日記にこう書き残している。[1] ここで彼が「ゴロツキ」と名指しで批判しているのは、第一次世界大戦への従軍後、志願兵部隊「義勇軍 Freikorps」に参加し、その後ナチズム運動へと合流したＨ・Ｏ・ハウエンシュタインという人物である。ナチ党が再建の只中にあったこの時期、ベルリンでは大管区指導部と闘争組織たる突撃隊（ＳＡ）との対立が深まり、時には暴力沙汰にまで発展した。こうした中、ハウエンシュタインはＳＡ側の中心人物として党内反対派を形成し、さらには党から除名された後も「ドイツ独立国民社会党 Unabhängige Nationalsozialistische Partei Deutschlands: 以下、ＵＮＳ」を名乗る分派組織を結成した。本稿はこの「独立ナチ党」たるＵＮＳの結成と解体を、義勇軍研究の立場から再検討し、それがナチズム運動にとっていかなる意味を有していたのか考察するものである。

そもそも義勇軍とは、敗戦と革命に直面した第一次世界大戦直後のドイツにおいて、国内の治安維持や東部での国境守備、そしてバルト地域への干渉戦争を展開した志願兵部隊の総称である。その一部は一九二〇年三月の反政府クーデタ・カップ一揆でヴァイマル共和国政府に叛旗を翻すとともに、以後も地下に潜りながら、一九二三年九月のルール闘争終結に至るまで様々な政治的暴力を行使することとなる。[2]

従来の研究では、こうした暴力性やナチ党との人的連続性を理由に、義勇軍を「ナチズムの前衛」（Ｒ・Ｇ・Ｌ・ウェイト）として位置づける見方が支配的だった。[3] しかしながら、拙著『暴力の経験史』が示したように、義勇軍経験とその基調をなす「暴力を辞さないアクティヴィズム gewaltbereiter Aktivismus」は、ナチズム運動だけでなく、反ヒトラー・反ナチ抵抗運動へとつながる方向性も有していたし、[4] また芝健介氏や岩崎好成氏の研究が指摘するように、ナチズム運動へ合流した場合も、Ｗ・シュテンネスに代表される義勇軍出身のＳＡ指導者が叛乱に及び、運動を内部から動揺させるという事態も生じていた。[5] その意味で義勇軍出身者と彼らの経験は、ナチズム運動にとって諸刃の剣だったとい

えよう。

義勇軍出身のナチについては、すでに膨大な研究蓄積が存在する。ただ、先ごろSA指導者F・P・v・ザロモンに関する伝記研究を上梓したM・A・フラシュカが指摘するのは、ハウエンシュタインのような歴戦の義勇軍指導者が、その重要性にもかかわらず、今なお「簡明な学問的検討」の対象とされていない点である。[6] 実際、ハウエンシュタインに関する従来の叙述は、彼の義勇軍時代の盟友にして、死後「第三帝国の最初の兵士」として顕彰されたA・L・シュラーゲターや、彼らと一時行動をともにしたG・ロスバッハなど、他の義勇軍指導者に関する研究で付随的になされる程度であった。[7]

フラシュカ自身は、ナチズム運動に合流した（元）義勇軍指導者について、①ナチ党への失望者、②革命家、③軍人、④出世主義者といった四つのグループに腑分けし、さらにハウエンシュタインをナチ党への幻滅ゆえに組織や運動から離れた①のグループに分類している。[8] 確かに一九二六／二七年におけるハウエンシュタインの活動とUNSについては、これまでM・ヴァイスベッカーが、その一揆主義的性格とヒトラーに対する敵愾心を指摘し、[9] またO＝E・シュッデコプフが、コミュニストやソヴィエト・ロシアとの共闘を目指す民族思想「ナショナル・ボルシェヴィズム」の一例として紹介している。[10] しかし今回、両者が利用しているUNS機関誌『ドイチェ・フライハイト Deutsche Freiheit』の論調や、ミュンヘンの現代史研究所によるハウエンシュタインへのインタヴュー記録（一九五六年）を再度検討したところ、先行研究とはまた異なる像が浮かび上がってきた。[11]

この点を考える上で参考になるのは、ベルリンSAに関する研究をおこなったM・シュスターの整理である。[12] 彼はヴァイスベッカーの研究に依拠しつつも、「ヒトラー対ハウエンシュタイン」という単純な対立構図を否定し、ヒトラー派、シュトラッサー派、そしてハウエンシュタイン含むアクティヴィスト派の三つ巴として、当時のベルリン・ナチ党の状況を捉えようとする。本稿でもこの枠組みを援用し、義勇軍出身者ハウエンシュタインによるUNSの結成と解体までの流れについて、分析を加えていきたい。なお、内容に関しては拙著と重複する部分があることを予めお断りしておく。

2　レーヴェンフェルト旅団からハインツ機関へ

ハウエンシュタインは一八九九年九月二二日、ドレスデンで生を受けた。彼の出自については、家族がエーガーラント（現在のチェコ領ヘプ）出身であることは判明しているものの、それ以外の点については明らかでない。第一次世界大戦に志願兵として従軍し、一九一八年一一月の敗戦を下士官として迎えた彼は、その後義勇軍「レーヴェンフェルト第三海軍旅団」に参加、一九一九年を通じて東部国境地域でポーランドとの闘争を展開した。そして一九二〇年一月、バルト地域での干渉戦争を繰り広げた義勇軍の一団がレーヴェンフェルト旅団に合流する中で、のちに盟友となるシュラーゲターとの邂逅を果たすことになる。[13]

一九二〇年三月、ヴェルサイユ条約にもとづき軍縮を進める共和国政府に対し、義勇軍ならびに正規軍たる「国軍 Reichswehr」の一部は、極右政治家W・カップを首謀者とする反政府クーデタ・カップ一揆に参加した。ハウエンシュタインが所属するレーヴェンフェルト旅団は、このときブレスラウ（現在のポーランド領ヴロツワフ）で地域的な軍事独裁を樹立するとともに、捕虜となったドイツ独立社会民主党系の市議会議

員を虐待・殺害した。一揆はわずか数日で挫折するものの、これによりレーヴェンフェルト旅団が解体されることはなく、今度は共和国政府の要請のもと、ルール地方で勃発した労働者蜂起の鎮圧に臨んだ。ヴェストファーレンでコミュニスト系の炭鉱労働者を相手に戦闘を繰り広げた旅団メンバーらは、蜂起を鎮圧して以降も現地に留まり、ボットロプで蜂起とは無関係の一般市民を即時射殺するなどの行為に及んだ。[14]

このようにレーヴェンフェルト旅団メンバーの暴力は、闘争を経るにつれて次第にエスカレートしていき、ついには一般市民の虐殺にまで発展した。しかしその存在は、一九二〇年五月末に旅団が解体されて以降も、国家や領地の安定のために必要とされた。メンバーの大半は国軍や「治安警察 Sicherheitspolizei」、ないしは東部ドイツの大土地所有者の支援により結成された「協働団 Arbeitsgemeinschaft」に流入し、そこにおいて旅団時代の人的ネットワークと武装状態を維持することになる。そしてハウエンシュタインの場合も、中央官庁からの極秘支援のもとに特殊警察「ハインツ機関 Organisation Heinz: 以下、OH」を結成し、一九二一年初夏にはオーバーシュレージエンにてポーランド系志願兵部隊との国境闘争を展開したのであった。[15]

オーバーシュレージエン闘争は、義勇軍運動にとってひとつの画期となった。そこでは民族至上派 Völkische の策動を通じて反セム主義が浸透し、一九一九年半ば以降強まっていたメンバーらの「匕首伝説」的な現状解釈と共和国への憎悪をさらに強固なものとした。そしてこれを機に、義勇軍運動は一揆主義的な反共和国運動としての性格をよりいっそう強めていくこととなる。[16] こうした中、OHの暴力は組織の外部だけでなく、その内部にも向かっていった。ハウエンシュタイン自身の証言によれば、彼らはオーバーシュレージエンでの活動を「闇の中の戦争」と呼んでおり、そこでは敵であるポーランド人の殺害はもちろんのこと、組織内の「裏切り者」に対して、中世ドイツの私刑に範をとった「フェーメ殺人」を執行したのである。[17]

一九二一年七月、連合国の介入によって、オーバーシュレージエン闘争は義勇軍やその後継組織の解体という形で幕を閉じた。その後ベルリンへと拠点を移したハウエンシュタインは、盟友シュラーゲターとともに物流会社を立ち上げ、表向きは商人として生計を立てることになる。[18] だが、一九二二年六月二四日に共和国外相W・ラーテナウが義勇軍出身の右翼青年らの手で暗殺されると、ハウエンシュタインは事件への関与を疑われ、逮捕後しばらくの間アレクサンダープラッツの留置所に勾留された。[19] その後証拠不十分にて釈放となった彼は、この逮捕を教訓としながら、官憲側の追及をかわしつつ、OHの人的ネットワークを維持するための方策へと乗り出していく。

3 「ナチ党ベルリン支部」の結成と内紛

義勇軍作家F・グロムボウスキの著書『ハインツ機関』（一九三四年）には、釈放直後のハウエンシュタインがOHの元部隊指導者らに送った手紙が引用されている。そこでは、オーバーシュレージエン闘争で戦線を同じくした義勇軍指導者ロスバッハとともに「北部ドイツにおける国民社会主義運動を牽引する決意を固めた」ことが宣言され、ミュンヘンで開催される第一回会議への参加が呼びかけられた。[20] ハウエンシュタイン自身が証言したところによれば、彼らは官憲による組織の禁止や身柄の拘束を回避するために、政党組織であるナチ党への合流を決意したのである。[21]

この結果、ベルリンでは一九二三年一一月一九日に「大ドイツ労働者党 Großdeutsche Arbeiterpartei: 以下、ＧＤＡＰ」が結成された。これは事実上の「ナチ党ベルリン支部」であり、結成に際し作成された綱領の文面も、ナチ党二五ヵ条綱領のそれと同一のものだった[22]。これに関してハウエンシュタインは、自分やシュラーゲターが「偽装のために党に身を置いたのであって、イデオロギーや綱領には関与しなかった」と回想している。ただし芝氏が指摘するように、「ナチズム運動は必ずしも第一にイデオロギー的・綱領的運動なのではなく、むしろカリスマ的な運動[23]」なのであって、その意味で問題となるのは、やはりヒトラーとの関係であろう。

ハウエンシュタインとヒトラーは、一九二三年一月に始まるフランス＝ベルギー連合軍のルール占領をめぐって、正反対の対応をとった。共和国政府が「消極的抵抗」として現地の労働者や公務員に不服従を呼びかける中、ヒトラーは占領を共和国崩壊の好機と捉え、抵抗への不参加をナチ党員に呼びかけた[24]。しかしハウエンシュタインはこの動きに同調せず、シュラーゲターをはじめとする同志とルール地方に赴き、占領者に対する暗殺や破壊工作活動、つまりは「積極的抵抗」を展開したのである[25]。当時の状況として、ヒトラーは本拠地バイエルンにおいてすら、義勇軍出身の右翼アクティヴィストの統制に手を焼いていた[26]。ましてベルリンを拠点とするハウエンシュタインに、その統制が及ばなかったのも無理はない。少なくとも一九二三年初頭の段階において、彼はヒトラーに追従するような存在ではなかったといえよう。

またハウエンシュタインはルール闘争のさなか、ＧＤＡＰをともに立ち上げたロスバッハとも険悪な仲に陥っていた[27]。そして両者の決裂は、フランス警察による一九二三年四月七日のシュラーゲター逮捕を経て決定的なものとなる。シュラーゲターがフランス軍により処刑される直前、ハウエンシュタインは、ＯＨの分裂を目論んだ末シュラーゲターをフランス側に売り渡した黒幕として、ロスバッハを名指しで批判したのである[28]。オーバーシュレージエン闘争で先鋭化した義勇軍の内紛は、ナチ党への合流を経てなお継続し、ルール闘争においても表出したのだった。

シュラーゲター処刑後、ナチ党はルール闘争への不参加方針を示したにもかかわらず、彼が党員であった点を強調するとともに、その死を共和国に対する報復主義的な方向へと水路づけた[29]。そして一九二三年九月、共和国政府の「消極的抵抗」中断宣言によりルール闘争が終結を迎えると、こうした反共和国の動きはよりいっそう勢いを増し、一一月九日のミュンヘン一揆で一度ピークを迎えることになる。そしてそこには、ロスバッハをはじめとした多くの義勇軍出身者が参加したのだった[30]。

ミュンヘン一揆が挫折すると、ナチ党およびその闘争組織たるＳＡは解体され、義勇軍出身者の多くはＥ・レームのもと新たに結成された「前線団 Frontbann」へと合流した。官憲の手から解放されたハウエンシュタインもまた、ベルリンで一九二四年八月に結成された「北部前線団 Frontbann-Nord」に参加し、そこで亡き戦友の名を冠した「シュラーゲター中隊 Schlageter-Kompanie」を率いることになる[31]。ヒトラーの呼びかけに応じず、ルール闘争に参加したハウエンシュタインが、なぜナチ党との接点をもち続けたのか。彼自身の回想的証言にもとづくなら、それはおそらく、義勇軍とナチ党がともに「反市民的態度」を有しているとの認識からだった[32]。

4　ベルリンにおける大管区指導部と突撃隊の緊張関係

周知のように、ナチ党は一九二四年末のヒトラー仮釈放を経て再建期へと移行する。ベルリンでも一九二五年一月七日にナチ党禁止令が解除され、二月一七日にはGDAP結成メンバーであるE・ティムのもと、ベルリン・ナチ党の「再建」がなされた。党員数は大きく見積もっても三五〇名程度であったとされる。ただし注意すべきは、この「再建」がヒトラーによるミュンヘンでの党再建宣言（一九二六年三月一四日）に先駆けた、下からの自生的動きだった点である。換言すれば、ヒトラーはティムの「再建」したベルリン・ナチ党を基盤としながら、大ベルリン大管区の正式な設立に至ったのであった[33]。

M・ブロシャートによると、「ベルリンにおけるナチ党結成は、一九二四／二五年に成立した北部ドイツにおける他のナチ支部グループと同様、組織的・イデオロギー的にみて、シュトラッサー兄弟とその確固たる社会主義的・反市民的、かつプロレタリア的・革命的な構想の影響下にあった[34]」。事実、大ベルリン大管区指導者に就任したE・シュランゲは、シュトラッサー兄弟と厚い信頼関係で結ばれており、彼らが立ち上げた闘争出版社や「NSDAP北部・西部ドイツ大管区活動共同体Arbeitsgemeinschaft der nord- und westdeutschen Gaue der NSDAP」に対する積極的な支援や協力をおこなっていた[35]。

とはいえ、大ベルリン大管区が指導者シュランゲのもとで一丸となっていたわけではない。そこでは大管区指導部とSAとの対立が始まっていた。SAの再建については、すでに一九二五年春の段階で党全体として話が進んでいた。だが、シュランゲは組織防衛の観点から、闘争組織を公然と擁することは得策でないとし、ベルリンでのSA結成に難色を示した。するとベルリン各区の北部前線団指導者らは、一九二五年末に抗議の意味を込めてSAを組織し、大管区指導部との対決姿勢を明確にしたのである。シュランゲは事態を収拾すべく、表向きは「スポーツ隊Sportabteilung」という形で一九二六年三月一二日に各区のSAの存在を追認し、二二日にはその中央組織「NSDAP大ベルリン・スポーツ連盟Sportverband Groß-Berlin der NSDAP」を設立した[36]。だが時すでに遅く、大管区指導部とSAとの間には埋めがたい溝が広がっていた。

ベルリンSA指導者を務めたのはロスバッハ義勇軍出身のK・ダリューゲであり、彼は一九二二年一一月一九日のGDAP結成以前、ロスバッハとハウエンシュタインがベルリンで試験的に結成したナチ党の偽装組織「労働者解放同盟Arbeiterbefreiungsbund」のメンバーでもあった。生粋のアクティヴィストであるダリューゲは、目立った行動を極力慎もうとするシュランゲの方針を拒否し、またシュトラッサー兄弟とも反りがあわなかった[37]。ダリューゲにとっては義勇軍時代のつながりの方が重要だったようであり、ハウエンシュタインが一九二六年、ナチ党への再入党を果たしたのも、ダリューゲと話し合った結果だという[38]。

ダリューゲ率いるベルリンSAは、「元義勇軍戦士や失業者、その他社会的に根無し草となった集団や個人」からなり[39]、さらに同地の党組織よりも勢いがあった。例えば一九二六年五月、ベルリンでは義勇軍出身者からなる右翼急進派の防衛団体（またはその偽装団体）、「ヴィーキング同盟Wikingbund」と「スポーツ協会オリンピアSportverein Olympia」が禁止され、両団体のメンバーがSAに流入するという事態が生じた。この結果、結成当初は三〇〇名から四五〇名程度だったベルリンSAも、同年六月に八〇〇名規模にまで膨らむことになる。対する党組織は、同年末の段階でも五〇〇名に満たない規模だった[40]。そしてこのよう

なSAの拡大を前に、大ベルリン大管区指導者シュランゲは、もはや為す術のない「絶望的」な状況へと追いこまれた。[41] かくして大管区の運営は一九二六年六月以降、指導者シュランゲから指導者代理であるE・シュミーディッケへと委ねられたのである。[42]

一方、ベルリンSA指導者ダリューゲは、一九二六年七月初頭にヴァイマルで開催されたナチ党全国大会に参加し、四個中隊約六〇〇名のSA隊員を率いて大規模な行進をおこなった。彼はSAを大ベルリン大管区の代表であるかのように演出することで、党全体にその存在感を示そうとしたのである。[43] またハウエンシュタインも、これと同時期にナチ党の失業者向けプロパガンダ組織「失業者中央連盟 Zentralverband der Erwerbslosen」を結成し、その指導者に就任している。彼はその集会演説において、大管区指導部を公然と攻撃するとともに、自身の「市民的立場」を重視し、党の「革命的立場」をないがしろにする指導者たちをも批判したのであった。[44]

このようなアクティヴィスト派による党内イニシアティヴ獲得への動きは、一九二六年八月二五日に開催されたベルリン・ナチ党の首脳会議でよりいっそう顕著となる。党組織やSAの指導的メンバー総勢一二〇名が一堂に会したこの会議では、次期大管区指導者の選出について話し合いがおこなわれた。ダリューゲはここで、シュランゲとシュミーディッケがベルリンの党組織壊滅を目論む他勢力に通じていると非難し、特にシュミーディッケに対しては一刻も早く大管区指導者代理の座を退くべきだと主張した。そして次なる大管区指導者に相応しい人物として、自身の戦友であるハウエンシュタインを推挙したのである。これに対し、シュランゲと親しく、またSAに対する党組織の優位を重んじるO・シュトラッサーは、強く反発した。両陣営は互いに譲らず、ついにはハウエンシュタインとO・シュトラッサーとの間で乱闘が勃発し、会議は喧騒の中で幕を閉じたのだった。[45]

5 「独立ナチ党」の結成とその闘争姿勢

ナチ党大ベルリン大管区において発生した指導者任命問題をめぐる内紛は、首脳会議から二ヶ月を経てなお、一向に収束する気配をみせなかった。それどころか、党内ではハウエンシュタインを中心に反対派が形成され、さらには対立するメンバー同士が決闘に臨むという光景すらみられた。[46] こうした事態を受け、大管区指導者代理シュミーディッケは一九二六年一〇月二七日、ついにハウエンシュタインを除名処分とし、ヒトラーも一一月五日にこれを承認した。[47]

またヒトラーは、一一月九日にゲッベルスを大ベルリン大管区指導者に任じることで、一連の事態の収拾をはかった。すなわち、当時シュトラッサー派からヒトラー派へと「移行」（中村幹雄）しつつあったこの人物を組織の中心に据えることにより、前者の怒りを鎮めつつ、後者による大ベルリン大管区への統制を強めようとしたのである。さらに義勇軍出身のアクティヴィスト派に対しては、ダリューゲを引き続きベルリンSA指導者に任用し、加えて大管区指導者代理にも起用することで、その支持をつなぎとめようとした。[48]

党から除名され、また戦友ダリューゲからも裏切られたハウエンシュタインは、ついに自らを中心とする分派組織の結成へと舵を切った。一九二六年一一月二四日、彼は約三〇〇名の同志とともにベルリン、ライプツィヒ、そしてハレにおいてUNSを結成した。この「独立ナチ党」に関して、ベルリン市警察本部は一二月一六日付報告で「党が闘争

対象とするのは特にヒトラーである。彼は国民社会主義の指導者として認められていない」としている[49]。この報告書に準じれば、ハウエンシュタインはヒトラーを相手とする叛乱に及んだことになる。だが、その二週間前に国家公序監視委員がおこなった報告によると、「ハウエンシュタインの闘争対象はヒトラー個人ではなく、その周辺人物であり、残りの国民社会主義指導者たち」であった[50]。

では実際のところ、UNSはいかなる闘争をおこなったのだろうか。この点については、一九二六年一二月七日に刊行された機関誌『ドイチェ・フライハイト』第一号に明示されている。その一面見出しには「ヒトラーか、それともシュトラッサーか?」という二択が掲げられるとともに、読者に対して「ドイツ独立国民社会党への入党勧告」がおこなわれた。文章作成者は一九二五年初頭、ヒトラーに先駆けてベルリン・ナチ党の「再建」に及んだE・ティムであり、彼はその冒頭で「一体全体、どうしてヒトラーは前線戦士ハウエンシュタインに対する、オーバーシュレージエンとルール地方におけるシュラーゲターの指導者に対する、誹謗中傷攻撃を許容しているのか?」との疑問を投げかけ、ハウエンシュタイン除名処分の不当性を訴えかけた。そこでは、「前線戦士」や「シュラーゲターの指導者」といったハウエンシュタインの経歴が強調されると同時に、「誹謗中傷攻撃」を繰り返すゲッベルスら党指導者への批判が展開されている。しかしより重要なのは、「入党勧告」の結びに付された以下の宣言である。

「われわれは偽りの指導者どもの手から国民社会主義運動が解放されることを望む! われわれは闘争を続けながら、誤った指導を受けた万国の大衆 internationale Massen にヒトラーの二五ヵ条を授け、第二の革命、つまりは国民社会主義の革命を伝導せんと欲す! [中略] 党の上役どもに対する闘争に積極的に参加しようとする者はみな、ドイツ独立国民社会党の隊列に加わっている。国民社会主義革命万歳! アドルフ・ヒトラー万歳![51]」

この宣言から明らかなのは、「ヒトラー個人ではなく、その周辺人物」を闘争対象とするハウエンシュタインの姿勢が、UNS全体を貫いていたことである。

また『ドイチェ・フライハイト』第一号掲載の論説「シュラーゲターへの裏切り」では、一九二三年のルール闘争とシュラーゲター処刑、そしてロスバッハの「裏切り」について、ハウエンシュタイン自らが解説をおこなっている。彼はそこで、一連の出来事をぞんざいに論じ、時にシュラーゲターへの中傷までも展開したドイツ社会民主党系報道機関の「無責任な」姿勢を批判するとともに、同様の「無責任さ」が現在のG・シュトラッサーの文筆活動にも見受けられるとの主張を展開した[52]。

こうしてみると、シュラーゲターとの共闘というハウエンシュタインの義勇軍経験は、今や「偽りの指導者ども」を批判するための政治的な語りとして、UNS、そして彼自身により利用されたといえるだろう。

6 「独立ナチ党」の解散とシュラーゲター朋友同盟の結成

では、義勇軍経験の基調としての「暴力を辞さないアクティヴィズム」は、ヒトラーとの闘争を敢えて回避しようとするUNSにおいて、どのような展開を遂げたのだろうか。実は驚くべきことに、それはドイツ共産党の闘争組織「赤色前線戦士同盟 Roter Frontkämpferbund: 以下、

RFB」に対する共闘の提案となって表出した。一九二七年一月一〇日付『ドイチェ・フライハイト』第三号では、「誠実なる戦士への手紙」という形でRFBに対するUNSの立場が説明されたのち、次のような呼びかけがなされた。

「RFBの同志よ！　われらはともにアクティヴィストである！　われらはともに行動を欲する！　諸君の陣営のプチブルどもについては、われわれがNSDAP内のプチブルどもを放っておくのと同じように、そのまま構わずに踊らせ、パレードに興じさせておけばよい。われわれは互いに手を差し出し、われらの至高の目標に向けた行動を通じて、ともに闘争しようではないか。民族的・社会主義的革命のために！」[53]

しかしながら、一九二七年を通じてUNSとRFBとの共闘が実現することは一度もなく、またUNS自体がそれどころではない状況へと陥っていった。機関誌『ドイチェ・フライハイト』の刊行は第三号から数ヶ月間滞りをみせ、また党員数も約一五〇〇名を境に伸び悩んだ[54]。そして一九二七年五月二二日、ようやく刊行された第四号に、もはやUNSの名前は掲げられなかった[55]。UNSは最終的に一九二七年一二月に解散し、約一年にわたるその活動に終止符を打つこととなる。

UNSが解散した一九二七年一二月末、ハウエンシュタインはすぐさまナチ党への復党を果たした[56]。ただ、党内にもはや居場所はなく、彼はその空白を埋めるかのように、同時期に「シュラーゲター朋友同盟 Bund der Freunde Schlageters」なる組織を新たに結成した。本部をハウエンシュタインの故郷ドレスデンに、また支部をベルリン、ライプツィヒに置いたこの組織は、青年のスポーツ的修養や民族的啓蒙、そして何よりシュラーゲターをめぐる記憶の保存を活動目標に掲げていた。政治的にはナチ党のほか、ドイツ国家国民党、民族至上主義ドイツ自由運動のメンバーが参加しており、その多くが義勇軍出身者だった[57]。

政党政治の世界からはじき出されたハウエンシュタインは、義勇軍出身者からなる超党派右翼組織の枠内で亡き盟友シュラーゲターを崇拝し、またそれによって義勇軍時代から築いてきた人的ネットワークを辛うじて維持することができた。このような想起を通じた義勇軍経験のリフレインと、義勇軍出身者としてのアイデンティティの再確認は、ヴァイマル末期に入ると、義勇軍雑誌の刊行という具体的なプロジェクトへと発展を遂げる。編集長となったハウエンシュタインは、そこで一九一八年から一九二三年までの義勇軍史の編纂を担った。そしてナチ体制成立後、そこに集積された義勇軍の記憶は、義勇軍史をナチ前史として位置づけ、またシュラーゲター崇拝をヒトラー崇拝へと接続させようとするナチ・プロパガンダにとって、これ以上ないほど有益な資源となる[58]。

7　おわりに

ヴァイマル中期において、大ベルリン大管区を中心に展開されたハウエンシュタインならびにUNSの政治活動は、具体的な成果を得ることなく幕を閉じた。そこにおいては、義勇軍経験が当事者を結びつける紐帯として必ずしも機能せず、むしろハウエンシュタイン、ダリューゲ、そしてシュトラッサー兄弟といった義勇軍出身者が互いに反目し合う状況が生み出された。

この点について、ハウエンシュタインが第二次世界大戦後に主張したのは、「狂信的な党の信奉者による義勇軍出身者 Freikorpsleute への働きかけ」により、「相当数の義勇軍出身者が以前のつながりから引き剥がされ」、またそうした中にあって「古い軍団精神から離反している、または政治的に受け身のスタンスである」という非難の応酬が続いた結果、「義勇軍出身者の共同体精神に楔が打ち込まれた」という点である。[59] しかし本稿で確認したように、内紛自体は義勇軍時代から続くある種の「伝統」であり、したがって元々存在していたメンバー間の亀裂に、ヒトラーの統制力がうまく入り込んだと考える方が妥当であろう。その過程では、一九二三年初頭の段階でヒトラーの統制から外れていたハウエンシュタインもまた、シュトラッサー派率いる大管区指導部との主導権争いに興じるあまり、最終的にはヒトラーのカリスマ性にすがるしかなくなったと考えられる。

またそれと軌を一にするにする形で、ハウエンシュタインの義勇軍経験も変質と分散を遂げていった。第一にシュラーゲターとの共闘経験は、ＵＮＳの言論活動において、ゲッベルスやＧ・シュトラッサーを批判する際の政治的な語りとして利用された。しかし第二にそうした語りは、ＵＮＳ解散後、シュラーゲター朋友同盟の枠内でシュラーゲター崇拝へと回収され、最終的にヒトラー崇拝にも寄与することになる。そして第三に「暴力を辞さないアクティヴィズム」は、ＲＦＢへの共闘の提案へと結実した。シュッデコプフはここにナショナル・ボルシェヴィスト的な思想性を見出しているが、本稿の文脈からすると、むしろアクティヴィスト的志向性に由来するものといえよう。

最後にＵＮＳの結成と解体がナチズム運動においてもつ意義について確認しておこう。それは一言でいえば、ハウエンシュタインをヒトラーの統制下に置き、その「暴力を辞さないアクティヴィズム」を党にとって無害化するうえでの重要な契機であった点、そして彼のもとに集積された義勇軍の記憶を、ナチ・プロパガンダに接続するうえでの前提条件を形づくった点にある。ヴァイマル末期に党への叛乱を起こしたＯ・シュトラッサーやシュテンネスとも、また第二次世界大戦中にベーメン・メーレン保護領副総督にまでのぼりつめたダリューゲとも異なり、牙を抜かれた「ゴロツキ」は、義勇軍とナチズムをつなぐ「記憶の場」の耕作人として、ナチズム運動に重大な貢献を果たしたのである。

【付記】

本稿は、平成二四～二五年度科学研究費補助金・特別研究員奨励費「戦間期ドイツにおける暴力の経験とナチズム――義勇軍戦士の思想と行動を中心に――」（課題番号：１２Ｊ００６５７）、平成二六～二八年度科学研究費補助金・特別研究員奨励費「戦間期ヨーロッパにおける内戦と義勇軍運動の経験史的研究：独露間の往還関係を中心に」（課題番号：１４Ｊ０２６８０）、ならびに平成二九年度九州大学ＱＲプログラム（わかばチャレンジ）「戦間期ドイツにおける暴力と「転向」の経験史：ナチズムから反ファシズムへの軌跡を軸に」による成果の一部である。

注

(1) *Die Tagebücher von Joseph Goebbels*, T. I, Bd. 1/II, hg. von E. Fröhlich, München 2005, S. 139–140 (16.10.1926).

(2) M. Sprenger, *Landsknechte auf dem Weg ins Dritte Reich? Zu Genese und Wandel des Freikorpsmythos*, Paderborn 2008, S. 10.

（3）R・G・L・ウェイト（山下貞雄訳）『ナチズムの前衛』新生出版、二〇〇七年。

（4）拙著『暴力の経験史――第一次世界大戦後ドイツの義勇軍経験一九一八～一九二三』法律文化社、二〇一六年。なお、拙著ではgewaltbereitを「暴力をともなう」と訳していたが、「暴力を辞さない」の方がより適切であることを知り、このように修正した。R・ライベルト氏、熊野直樹氏、後藤啓倫氏からのご教示に感謝申し上げたい。

（5）芝健介「闘争期のナチ突撃隊をめぐる問題」『現代史研究』二八号（一九七六年）、岩崎好成「ナチズム運動と『シュテンネス反乱』」『史学研究』一五二号（一九八一年）を参照。

（6）M. A. Fraschka, *Franz Pfeffer von Salomon. Hitlers vergessener Oberster SA-Führer*, Göttingen 2016, S. 19.

（7）S. Zwicker, „*Nationale Märtyrer*“. *Albert Leo Schlageter und Julius Fučík. Heldenkult, Propaganda und Erinnerungskultur*, Paderborn 2006; B. Sauer, „Goebbels' „Rabauken“. Zur Geschichte der SA in Berlin-Brandenburg“, in: *Berlin in Geschichte und Gegenwart. Jahrbuch des Landesarchivs Berlin*, Berlin 2006, S. 107–164. ただしポーランド語文献まで含めると、F・ビャウィの義勇軍研究が詳細な叙述をおこなっている。F. Biały, *Niemieckie ochotnicze formacje zbrojne na Śląsku 1918–1923*, Katowice 1976; idem, *Ruch narodowosocjalistyczny w prowincjach śląskich. Początki – postępy – przejęcie władzy*, Wrocław 1987. 入手に際しては、衣笠太朗氏の協力を得た。

（8）Fraschka, *Salomon*, S. 504–506.

（9）O.-E. Schüddekopf, *Nationalbolschewismus in Deutschland 1918–1933*, Frankfurt a.M. 1973, S. 193–194.

（10）M. Weißbecker, „Unabhängige Nationalsozialistische Partei Deutschlands (UNS)“, in: D. Fricke [u.a.] (Hgg.): *Lexikon zur Parteiengeschichte. Die bürgerlichen und kleinbürgerlichen Parteien und Verbände in Deutschland (1789–1945)*, Bd. 4, Leipzig/Köln 1986, S. 201–202.

（11）ＵＮＳに関する文書は、ベルリン＝リヒターフェルデ連邦文書館とライプツィヒ州立文書館に所蔵されている。Bundesarchiv Berlin-Lichterfelde (BAB), R 1507/316; Staatsarchiv Leipzig (StAL), 20031/PP-V 4263. インタヴュー記録は、Aktennotiz Heinz Foerster über ein Gespräch mit Heinz Oskar Hauenstein, 18.7.1956（以下、Aktennotizと略記）, in: Institut für Zeitgeschichte (IfZ), ZS 1134, Bl. 1–8.

（12）M. Schuster, *Die SA in der nationalsozialistischen „Machtergreifung“ in Berlin und Brandenburg 1926–1934*, Berlin 2005.

（13）Aktennotiz, Bl. 1; S. Meinl, *Nationalsozialisten gegen Hitler. Die nationalrevolutionäre Opposition um Friedrich Wilhelm Heinz*, Berlin 2000, S. 378. Anm. 3; Schüddekopf, *Nationalbolschewismus*, S. 473. Anm. 27; Biały, *Niemieckie ochotnicze formacje*, s. 190–191. なお、ザウアーは一八九八年にヴッパータールのエルバーフェルトに生まれたとしているが、これは誤りである。Sauer, „Rabauken“, S. 147. Anm. 13.

（14）拙著『暴力の経験史』一一五 - 一一七頁。

（15）同右、一一八 - 一一九頁。

（16）同右、一二一 - 一二二頁。

（17）*Berliner Tageblatt*, 25.4.1928.

（18）拙著『暴力の経験史』一二三頁。

（19）F. Glombowski, *Organisation Heinz (O.H.). Das Schicksal der Kameraden Schlageters*, Berlin 1934. S. 120.

(20) Ebd., S. 126–127.

(21) Aktennotiz, Bl. 3.

(22) Programm der GDAP (Abschrift), Berlin, 19.11.1922, in: Thüringisches Hauptstaatsarchiv Weimar, Mdl, P 159, Bl. 5–7. ただし内容が完全に一致するわけではない。なぜなら、ＧＤＡＰ綱領にはナチ党綱領の第一二条と第一三条にあたる部分が抜け落ちているからである。拙著『暴力の経験史』一二三‐一三一頁も参照。

(23) 芝「闘争期のナチ突撃隊をめぐる問題」二一頁。

(24) K. Mües-Baron, *Heinrich Himmler. Aufstieg des Reichsführers SS (1900–1933)*, Göttingen 2011, S. 181–182; I・カーショー（石田勇治監修／川喜田敦子訳）『ヒトラー〈上〉――一八八九―一九三六 傲慢』白水社、二〇一五年、二一八‐二二九頁。

(25) Bericht von Kriminalkommissar Weitzel über die Tätigkeit der Organisation Hauenstein im besetzten Gebiet, Elberfeld, 25.5.1923, in: *Das Krisenjahr 1923. Militär und Innenpolitik 1922–1924*, bearb. von H. Hürten, Düsseldorf 1980, Dok. 16, S. 34–40; R. Meindl, *Ostpreußens Gauleiter. Erich Koch – eine politische Biographie*, Osnabrück 2007, S. 47–48.

(26) カーショー『ヒトラー〈上〉』二二二‐二二三頁。

(27) シュラーゲターの部下であったH・ザドウスキの回想によれば、ハウエンシュタインはルール闘争のさなか、組織防衛のためロスバッハと縁を切ったという。H. Sadowsky, „Missbrauch mit den Namen Schlageters!“, in: *OS-Korrespondenz*, 1. Jg., Fol. 4, 22.10.1930. しかしハウエンシュタイン本人の証言では、ロスバッハと彼の部下がホモセクシュアル的な傾向をもっていたため、一九二二年のうちに関係を絶ったとされている。Aktennotiz, Bl. 4. ちなみにＧＤＡＰは、一九二三年一月一〇日時点ですでにプロイセンでの活動を禁じられており、その後「ドイツ民族至上主義自由党Deutschvölkische Freiheitspartei」の党内グループとなった。J. K. v. Engelbrechten / H. Volz, *Wir wandern durch das nationalsozialistische Berlin. Ein Führer durch die Gedenkstätten des Kampfes um die Reichshauptstadt*, München 1937, S. 10; 拙著『暴力の経験史』一二五‐一二六頁。

(28) Bericht von Kriminalkommissar Weitzel, S. 40; Zwicker, *Märtyrer*, S. 58.

(29) 拙著『暴力の経験史』二一一‐二一三頁。

(30) 同右、二三九‐二四〇頁; Sauer, „Rabauken“, S. 109–110.

(31) Ebd., S. 110.

(32) Aktennotiz, Bl. 4.

(33) Engelbrechten/Volz, *Berlin*, S. 10-11; M. Broszat, „Die Anfänge der Berliner NSDAP 1926/27“, in: *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte* 8 (1960), S. 86; B. Kruppa, *Rechtsradikalismus in Berlin 1918–1928*, Berlin 1988, S. 307, 332; A. König, *Köpenick unter dem Hakenkreuz. Die Geschichte des Nationalsozialismus in Berlin-Köpenick*, Mahlow 2004, S. 23; Schuster, *SA*, S. 37.

(34) Broszat, „Anfänge“, S. 86.

(35) Ebd.; P. Hüttenberger, *Die Gauleiter. Studie zum Wandel des Machtgefüges in der NSDAP*, Stuttgart 1969, S. 39.

(36) Bericht des Außendienstes der Abteilung IA des Polizeipräsidiums Berlin (PB), Berlin, 19.4.1926, in: BAB, NS 51/197, o.Bl.; Engelbrechten/Volz, *Berlin*, S. 18; Sauer, „Rabauken“, S. 111; Schuster, *SA*, S. 39–40. なお、BAB, NS 51/197 の調査に際しては伊豆田俊輔氏の協力を得た。

(37) Broszat, „Anfänge“, S. 89–90.

(38) Aktennotiz, Bl. 4–5.

(39) Broszat, „Anfänge“, S. 89.

(40) A. Wirsching, *Vom Weltkrieg zum Bürgerkrieg? Politischer Extremismus in Deutschland und Frankreich 1918–1933/39. Berlin und Paris im Vergleich*, München 1999, S. 440; Schuster, *S4*, S. 40–45; Mües-Baron, *Himmler*, S. 297.

(41) *Die Tagebücher von Joseph Goebbels*, T. I, Bd. 1/II, S. 93–94 (10.6.1926).

(42) R. Muchow, „Situations-Bericht“, Juni 1926, in: Broszat, „Anfänge“, Nr. 1, S. 92–93.

(43) R. Muchow, „Situations-Bericht“, Juli 1926, in: ebd., Nr. 2, S. 93–95; Kruppa, *Rechtsradikalismus*, S. 337.

(44) Reichskommissar für Überwachung der öffentlichen Ordnung (RKÜO), Lagebericht, Berlin, 1.9.1926, in: Bundesarchivs Koblenz, R 134/30, Bl. 184: *Lageberichte (1920–1929) und Meldungen (1929–1933). Reichskommissar für Überwachung der Öffentlichen Ordnung und Nachrichtensammelstelle im Reichsministerium des Innern. Bestand R 134 des Bundesarchivs Koblenz*, hg. von E. Ritter, München 1979.

(45) Bericht des Außendienstes der Abteilung IA des PB, Berlin, 28.8.1926, in: BAB, NS 51/197, Bl. 120–121; Sauer, „Rabauken“, S. 112–113; Schuster, *S4*, S. 124.

(46) R. Muchow, „Situations-Bericht“, Oktober 1926, in: Broszat, „Anfänge“, Nr. 5, S. 101–103; 中村幹雄『ナチ党の思想と運動』名古屋大学出版会、一九九〇年、一四三頁。

(47) Hitlers Anordnung, München, 5.11.1926, in: *Hitler. Reden, Schriften, Anordnungen. Februar 1925 bis Januar 1933*, Bd. II, T. 1, hg. von B. Dusik, München 1992, Dok. 45, S. 84. なお、シュッデコプフはハウエンシュタイン除名の日付を一九二六年九月一五日としているが、これは誤りである。Schüddekopf, *Nationalbolschewismus*, S. 194. また拙著『暴力の経験史』二四四頁も同様の誤りを犯している。訂正のうえお詫び申し上げたい。

(48) Kruppa, *Rechsradikalismus*, S. 337–338; 中村『ナチ党の思想と運動』一四二―一四三頁、原田昌博「一九二七年三月の『リヒターフェルデ東駅の衝突』の展開と帰結」『ゲシヒテ』八号（二〇一五年）二四-二五頁。

(49) PB an RKÜO, Berlin, 16.12.1926, in: BAB, R 1507/316, Bl. 12.

(50) RKÜO an PB, Berlin, 3.12.1926, in: ebd., Bl. 6–7.

(51) E. Thimm, „Hitler oder Strasser?“, in: *Deutsche Freiheit*, 1. Jg., Nr. 1, Berlin, 7.12.1926, in: ebd., Bl. 50–51.

(52) H. O. Hauenstein, „Der Verrat an Schlageter“, in: ebd.

(53) „Rot Front?“, in: *Deutsche Freiheit*, 3. Folge, Berlin, 10.1.1927, in: BAB, R 1507/316, Bl. 38–41, 52–53.

(54) Schuster, *S4*, S. 126.

(55) ハウエンシュタインの肩書は「国民社会主義的反対派代表」となり、雑誌のサブタイトルも「ドイツ国民社会党機関誌」から「国民社会主義政治のための闘争誌」に変更となった。*Deutsche Freiheit*, 1. Jg., Nr. 4, Leipzig, 22.5.1927, in: StAL, 20031/PP-V 4263, o.Bl.

(56) Schuster, *S4*, S. 126.

(57) Abteilung IA des PB an das Preußische Ministerium des Innern, Berlin, 16.3.1928, in: Geheimes Staatsarchiv Preußischer Kulturbesitz, I. HA Rep. 77, Tit. 4043, Nr. 383, Bl. 2–3. 実際のところ、朋友同盟の幹部たちは

全員、シュラーゲターとともにフランス軍に捕縛された人物だった。Preußisches Ministerium des Innern an die Oberpräsidenten, Berlin, 11.6.1928, in: ebd., Bl. 17–18. また; Biały, *Ruch narodowosocjalistyczny w prowincjach*, s. 202–203 も参照。

(58) Zwicker, *Märtyrer*, S. 117, 133–137; M. J. Klein, *Ernst von Salomon. Revolutionär ohne Utopie*, Limburg a.d.Lahn 2002, S. 188.

(59) Aktennotiz, Bl. 3–4.

（いまい　ひろまさ・九州大学専任講師）